



第54号

平成16年(2004)

1月15日発行

(年4回発行)

### 明雅先生への謝辞

猫蓑会会長 青木秀樹

東明雅先生が十月二十日に永眠された。かねて病氣ご療養中であり、八十八歳というご高齢でもあったので、悲しいことであるが、先生は天寿を全うされたものと思いたい。

お知らせを受けて病院にお見舞いしたのは十月七日。この夏を自宅療養された間の巡回医を「いい先生だった」と医者嫌いの先生がおっしゃったことが印象的であった。十月十六日に先生が気にかけていらした「国民文化祭やまがた」と「芭蕉忌正式俳諧」のご報告にうかがったが、先生は痰がのどにからむ状態で最後は筆談になり、「猫蓑のみなさんによるしく伝えてください」というのが最後のお言葉であった。

明雅先生は大正四(一九一五)年三月熊本市生まれ。干支は乙卯の年であった。昭和十四(一九三九)年東京帝国大学国文学科卒業、東

京府立一中、のち旧制松本高校、戦後は信州大学で教鞭をとられ、ご専門の「井原西鶴研究」において一流の業績を残された。しかし、この明雅先生の前半生について、猫蓑会会員はほとんど存じ上げないのである。

先生の後半生は昭和三十六(一九六一)年九月に、信州大学文学部において根津芦丈師の「連句の講演と実作指導」を受けたことが契機になった。その時、明雅先生四十七歳。信州大学連句会が結成され、池田魚魯氏、望月紫晃氏、小出きよみ氏、高橋玄一郎氏、宮坂静生氏などが当時のメンバーであった。

明雅先生は芦丈師の教えを徹底的に吸収するとともに、「西鶴」から「芭蕉の俳諧」へと研究テーマを変えられた。連句が盛んでない時代であり、その大胆さも先生の特質のひとつである。古い文献の収集・整理・評価を重ね、独自に蕉風俳諧の理論化を試みられた。その成果は『連句入門』(中公新書)、『芭蕉の恋句』(岩波新書)、『連句辞典』(東京堂出版)などで知ることができる。

一方、連句実作での明雅先生は、清水瓢左師をして「東の明雅、西の梅遊」と言わしめた達人であった。めったにお使いになることはなかったが「俳諧師」の名刺をお持ちで、蕉風の正統を踏まえた大宗匠であった。

明雅先生は信州大学退官後、南柏に住まいを移され、昭和五十六(一九八一)年四月、杉内徒司氏の斡旋により、朝日カルチャーセンターで

「連句入門」を開講、正統派連句の普及に努められた。猫蓑会結成はその翌年四月であった。明雅先生のご指導は基本を厳しく教え、表現については各人の個性を尊重する柔軟な姿勢であった。先生ご自身も微妙に変化され、晩年は「軽み」の要素が強まったようである。

その中で先生が終始守られたことは、具象派としての句づくりであった。先生の発句、付け句はすべて意味明瞭、かつ詩情ある表現であった。「世態人情諷交詩」を標榜された先生の捌きはおおらかで、自他場は変化させるための手段として厳しく指導されたが、実作の場では「言い訳できればいいんだ」と怪しい句を平気でお採りになることもあった。先生は特に初心者にはやさしく、一座したものをみな連句好きにさせる達人であった。

連衆としての明雅先生は速吟とその広角打法に特徴があった。多様な発想の句を次から次に出される先生を見習い、速吟が古くからの門人をはじめ猫蓑会の伝統になった。

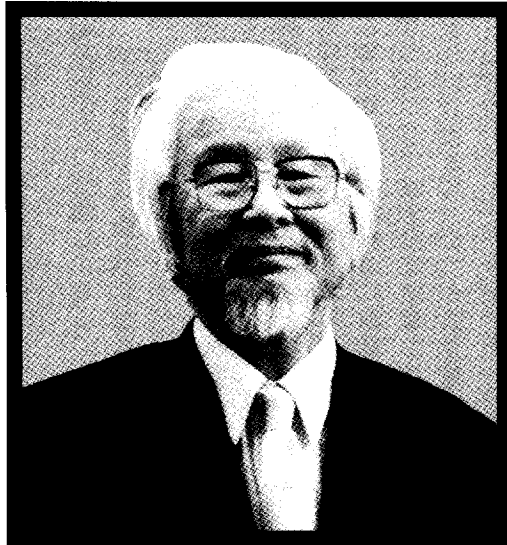
明雅先生はふだん柔軟であったが、これだけは許せないという一線があり、その場合はだれが何と言おうと絶対に譲られることがなかった。先天的な「肥後もつこす」の血が妥協を許さなかったのであろう。

最後に、伝統文芸としての連句の楽しさを教えて下さった先生にお礼を申し上げると共に、その志を受けつぎ一層研鑽を積むことをお誓いする。

# 東明雅先生を偲ぶ会

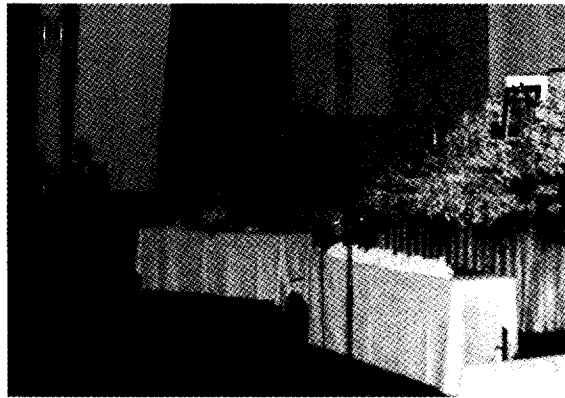
第一部 追悼会

第二部 追悼連句会



故東明雅先生

平成十五年十一月二十四日  
於 神田学士会館



第二部の追悼連句会の座は、来賓、会員取りまぜて十八席。どの座にも明雅先生が第二の故郷とされた松本市にちなみ、信州の山々の名前がつけられました。

これは明雅先生が主宰された「芦丈先生三十三回忌（平成十二年）」の折に、『山襖』にちなんで伊那の山々の名前を先生自ら選んでお付けになったことになったものです。

- 穂高岳 (三、一九〇m)
- 明神岳 (二、九三一m)
- 大天井岳 (二、九二二m)
- 蝶が岳 (二、〇四四m)
- 大滝山 (二、六一六m)
- 茶臼岳 (二、〇〇六m)
- 槍ヶ岳 (三、一八〇m)
- 乗鞍岳 (三、〇二六m)
- 常念岳 (二、八五七m)
- 燕岳 (二、七六三m)
- 霞沢岳 (二、五四六m)
- 王ヶ頭 (二、〇三四m)
- 中岳 (三、一〇一m)
- 南岳 (三、〇三三m)
- 赤岩岳 (二、七六九m)
- 横通岳 (二、七六七m)
- 六百山 (二、四五〇m)
- 有明山 (二、二六八m)

## 「東明雅先生を偲ぶ会」報告

猫蓑会 副会長 佛測健悟

十一月二十四日、神田学士会館において、前月二十日にご逝去された東明雅先生を偲ぶ会が執り行われました。当日は一日太陽のぞかぬ冬空でしたが、明雅先生とご親交のあった方々、連句協会関係の方々、そして猫蓑会員など百二十名のご参加をいただき、気持ちのこもった会となりました。

偲ぶ会第一部「追悼会」は、定刻十二時、蒲原志げ子・佛測健悟の司会進行で始められました。

初めに猫蓑会の青木秀樹会長より挨拶がありました。明雅先生は連句の指導者であると同時に心の大きな抛り所でしたが、この悲しみを乗り越え、お教え頂いた「世態人情諷交詩」としての連句を、次の世代にしっかりと伝えていくことをお誓いし、ご冥福をお祈りしますと述べました。

そして、奥様の東郁子様、ご長女の武井雅子様、ご次女の八代信子様、ご三女の杉野美奈子様が献花をされ、ご参加の皆様が続かれました。

杉内徒司様のご発声による献杯の後、ゲストの方々、明雅先生の思い出などお話し頂きました。

十九歳の時から三十二年間師事されてこ

れた二村文人様は、決して威張ることのない、弱い人、困っている人に同情心の篤い明雅先生のやさしいお人柄についてお話しされました。「連句は風韻がなければいけない」と度々仰られたとのこと、私たちも胸に留めおきたいお言葉です。

信州大学連句会のお仲間の宮坂静生様のお手紙をやはり明雅先生の教え子でいらっしゃった五十嵐譲介様に代読頂きました。明雅先生は思いやり深く、人間としての華やぎとりりしさをもった方でしたと、切々と述べられ、感動致しました。

川野蓼艸様の、昭和五十七年、たまたまご一座された席で突然倒れられた明雅先生の心臓停止を蘇生術にて救われたお話は、何度伺ってもどきどきと、明雅先生の強運と蓼艸様のご恩を思わないわけにはいきません。

猫蓑会と同じく根津芦丈門下の結社である都心連句会代表の土屋実郎様には、節目毎の心温まるご交流のなつかしいエピソードを聞かせて頂きました。

連句協会会長代行の磯直道様の、明雅先生に初めてお会いした折のほがらかな笑いのこと、一度も一座出来なかったのが心残りですというお話等は胸に沁みました。

明雅先生とは『連句辞典』（東京堂出版）の共同執筆者でいらっしゃった大畑健治様からは、辞典編集時の苦労話、裏話を興味深く聞かせて頂きました。これからは研究・鑑賞

に耐える連句作品を生みだしてゆくことが大事で、明雅先生の遺言でもあったと思うところ、お言葉には気持ちが引き締まりました。

最後に猫蓑会同人で、昭和五十六年四月に始まった朝日カルチャー「連句入門」の第一期生でいらした内田麻子様のお話には、信州から東京に出て来られた頃の明雅先生の情熱的なご指導が彷彿と致しました。

この後、追悼会を一部ご披露致しまして、東郁子様より本日の会へのご挨拶を頂きました。その中の「川野先生、二十年の長い間命を与えて下さいまして有難うございました」のくだりには胸が熱くなりました。

明雅先生のお教えを守り、会員一同仲良く切磋琢磨しながら現代連句の発展のためにこれからも精進することを明雅先生にお誓いして、第一部追悼会を閉会致しました。

休憩が入って第二部は、十八卓に分かれての「追悼連句会」。各席には先生が長く親しまれた松本に近い山々の名前が付けられました。ゲストの方々、又猫蓑会の宗匠方によるお捌きで、時間の許す限り、和気藹々と連句を楽しみ、なごりを惜しまました。

連句復興に機関車のように尽力された明雅先生のご生涯を前に立ち尽くすのみですが、今は只、どうぞお安らかにお休み下さいと申し上げるばかりです。当日ご参加の方々、お気持ちを寄せて下さいました皆様方、本当に有難うございました。

## 追悼文

猫蓑会の歴史を先生と共に歩まれた方々に追悼の文を綴っていただきました。

追悼句は、ご提出いただいたものすべてを掲載いたしました。先生への想いを、とてもこれだけで表わすことはできませんが……

明雅先生と信州

内田麻子

霜月七日、二・三日留守にした家に戻ると、松本碧さんから明雅先生追悼号に原稿を、と云うファックスが入っている。扱何々と思いついて手繰ると、次々にいろいろの場面が浮かんで来て、まとまりも付かず思案にくれていると、電話が鳴る。受話器を取ると郁子奥様のお声で、今林檎が届いて佛前に供えたところですと仰しゃる。はっと胸を突かれ「今年は少しでも早くお届けして、先生に召し上がっていただきたかったのに……」と申上げると受話器の向うもこちらも無念の涙にくれて仕舞うのでした。何かの折に郷里の無袋ふじをお送りしましたら「信州の味だ、松本の頃を思い出す」と喜ばれたのでした。

昭和五十五年秋柏に転居なさるまで、長く松本にお暮らしの先生でした。芦丈先生に会われ連句の道に進まれ、沢山の作品を巻かれ、その頃の事、高橋玄一郎のことなど伺いたい

こと山の様にありますのに……残念無念です。

先生と言う鏡

坂本孝子

東明雅先生が逝去されて、冬籠りの柱を失ったような寂しさに包まれております。思い返せば朝日カルチャーセンターの連句講座「解釈と鑑賞」「実作」に入門してからおよそ二十二年、連句世界の道標となつて下さったご恩は言葉に尽くすことはできません。「全く泳げない人もプールに投げ込んで、犬掻きから体で覚えさせる」のが先生の教え方でした。しかしバタ脚をしていれば必ず暖かい手をさし伸べて懇切なご指導をして頂いたのです。また作品のご批評・添削には紙数を惜しまず、式目や付味・一巻の流れなど明解なお手紙を下された事、今手元に残る封書の重さに改めて感謝の頭が下がるばかりです。

現代連句の作法を体系付けられた明雅先生の業績こそ不朽の物です。拙い私どもはこれからも無意識のうちに先生と言う鏡に映しながら連句を巻くことでしょうか。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

やんぬるかな

杉内徒司

「明雅さんが亡くなりました」という電話

を大畑健治氏から頂いたのは十月廿日夜九時四十分。結局その夜は一睡もできなかった。

昭和四十四年二月十六日、伊那市坂下公会堂の円熟社主宰芦丈翁一周忌の参加者四十七名。東京からは私一人。それは芦丈翁への勲五等瑞宝章叙勲実現に助力された三井武翁師が芦丈翁と同じ年の九月に亡くなったので、武翁門の私は出席を慫慂されていたからだつた。

この席上、信大連句会の方々、高橋玄一郎、宮脇昌三、東明雅氏等に初めてお目にかかった。

翌四十五年四月廿六日の松本市浅間神宮寺の芦丈翁大祥忌にも参加したので、明雅氏とは一年間の連句界の情報を交換したりした。明雅氏とは、それからの三十五年間共に連句復興のために行動するように成るとは、その頃は無論知る由もなかった。

私のバックボーン

副島久美子

限りある命とは申せ、とうとうその時が来てしまいました。

時雨中立ち尽くしてや師の別れ

十月二十二日、お見送りする私共の悲しみに答えるかのように、雨の一段と降りつの中、先生の棺は遠ざかりとうとう見えなくなりました。永遠のお別れです。

思い起せばACCの連句教室を受講、翌年には猫蓑会の一員として二十年余り、厳しくも楽しい連句人生を送って参りました。その間幾度となく正式俳諧のお役を頂き、その上立机宗匠を許される光栄を賜りました。そして日頃皆さんと連句を巻く楽しみ、幸せは、一重に先生の懇ろなお導きがあったればこそと、感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも先生の教えをバックボーンに据えて実作を重ね、又新参の方には、楽しく氣持よく連句の世界に溶け込める様お付き合います。最後にご冥福を心よりお祈り申し上げます。

師に捧ぐ

中田あかり

明雅先生は清冽な印象の方である。先生の追悼には美しい思い出がふさわしい。

昭和五十九年四月十九日私共連句教室の一行は、柏の逆井のかたくりと広池学園の花を吟行した。かたくりは小道の右手に咲き、やや小ぶりだったが、遠足に似た気分には皆高揚していた。やや歩き広池学園の校内で真盛りの花に対面した時、あつと息を呑んだ。

校舎の二階で生れたばかりの「二十韻」を巻き、この世の美しさと楽しさの限りを尽くす。どの顔も微笑み、どの卓も笑声に満ち、春風に枝が揺れ花びらが散りこむ。美しい日

本語が飛び交い、天下麗日。先生を囲む俸せ。誰も彼も若く輝いていた。連句という底無し

の快樂に取り憑かれた連衆である。  
先生 私達の連句に対する情熱を見守って下さい。先生とめぐり逢えた不思議さ、連句と出会った喜びを感謝しています。合掌

雲に鳥

市野沢弘子

草間時彦先生が「俳句文学館」の館長をされていた頃、東明雅先生と平井照敏先生をお招きになり、時々、三階の部屋で連句をされていた。草間先生は「後であんたもおいで」と言ってお下されたが、私には四時まで、図書室での勤務があったので、明雅先生に御挨拶するだけで、一度も席に加わることはなかった。御三人での連句は、私が「俳句文学館」に勤め始める前からされていた様で、明雅先生の第二連句集『猫蓑』（昭和五十七年）には三巻収められている。

明雅先生にお別れしてから、まだまだ平靜を取りもどせない心境ではあるが、明雅先生と、今年になってから先に逝かれた、草間先生と照敏先生と御三人で、また、遠いどこかで連句を楽しんでいらっしやるのではないだろうかと思えてくるこの頃であります。

芭蕉晩年の句「此秋は何で年よる雲に鳥」がわが事のように、しみじみと身にしてみて仕方

ない。

追悼 明雅先生 旅の思い出

上月敦子

明雅先生御逝去から早三ヶ月、思えば連句のレも知らぬ私がACCへ入れて頂いて廿年何とか一巻巻ける様に育てて頂きました。

師父と仰いだ方を失い、何とも悲しく心細い限りです。連句界に於ける御業績、御著書等については私等では書けませんが、私共は先生を囲む旅の思い出を書かせて頂きました。

ACCも初めの頃は人数も少く、一年に一度位「猫蓑遠足」と称して由縁の地を一泊か二泊位で出かけました。

ある年吉野山へお花見に行き、下千本は満開中千本は五分咲き、奥はちらほらと時期に恵まれました。その折夕餉もすみ先生はお風呂をすまされたのか、出窓に掛けて夜桜を眺めていらっしやうって、丁度私を通りかかったのを「ちよつとちよつと見てくらん綺麗だよ」と呼んで下さり「これが本当の日本の桜だよ」と魅入られた様に散る花に心を遊ばせていらっしやる様でした。その時のことが眼に焼きついています。先生、あの世もあの時の様に花が散っておりますか？ 御冥福を祈ります。

## 先生は花

原田千町

私の思い出の中の明雅先生はいつも花と共におられる。昭和五十八年秋ACCに入った翌年の春、初めて旅のお供に先輩方の中に加えて頂いたのが五浦、大観荘の桜がほころび始めていた。行きの車中、席に着くなり御句を出され連句が始まったのには心底びっくりした。夜は二巻同時に回る歌仙で、勿来の関も歩きながらの付句に2キ口瘦せた。

ちらちらと散り止まぬ花夢の中 明雅

その後は高遠の花、吉野の花、薄墨桜、長興山の花、石割り桜、角館の花、三春の滝桜、常照皇寺の花、西行桜、造幣局通り抜け等、むろん関口芭蕉庵の花も毎年御一緒に眺めたものだった。明雅先生には花がお似合いになられた、明雅先生には花がおありになった。花のある男性と云うのは居そうで居ないものだが、先生はその稀なお方だった。信大教授時代「恋句の明雅」と名を馳せられたそうだが、其のころから「花の明雅」とも云うべきお方だったのだと思う。

## 藪虱

下鉢清子

先生の追悼のことばを書かねばならないことになりました。まだ信じられないでおりま

すのに、何を書いたらよいのでしょうか。

思い出を語ることも手向け草の一つならば、脳中を駆け巡る様ざまな中から、月山の一夜を書くことにしましょうか。いつものように破顔一笑されますように。あれは平成四（一九九二）年の十月でした。月山の探勝が済んで八合目の行者小屋泊り、窓外は霧が深く白い闇の中。夕食後の二十句出句会も例のごとく、遠慮会釈なく酷評の限りを尽くし、扱と先生に一番風呂をお勧めしたのが仇、直ぐに先生は震え上がってお戻りに。風呂が沸き過ぎてしまっている上に、山上のこと埋める水が無いという始末、何とも情け無さそうなお顔に、奥様も私も唾然として言葉も無く。殿しんがの私は適温の入浴に満足したりしていたのです。貴重な有難い思い出ばかりが積み重なった十年でした。藪虱と渾名を付けられました。私、これからどこにひっ付けばよいのでしょうか。

合掌

## 一本のお電話

梅田利子

こんな言い方をするのは先生に大変失礼かと存じますが、「町角を曲がったら明雅先生にばったりとお会いした」と表現する事をお許し下さい。それ程先生にお会い出来たのは偶然のご縁でした。

昭和五十七年西宮でたまたま誘われた読書

会で連句に出会い、そのテキストが先生の

「連句入門」でした。六十一年に柏に帰り、新聞でカルチャーセンターの連句講座を知り、先生の講座なら行ってみようと思われ、四月と言いました。直ぐに一座に入れられ、四月と言ったのに汗たらたら緊張の座でした。そして又々偶然にも先生はお隣の町内に住んで居られる事を知りました。翌五月の或る日、突然先生からのお電話「明日光ヶ丘連句会ですからどうぞ」。あれから十八年末席を汚がすばかりの弟子でしたが、私にとっては、俳諧のすばらしい薔薇色の後半世を与えて頂きました。

先生本当に有難うございました。

## 悼 明雅先生

本屋良子

先生は昭和六十一年、逗子のわが家で始めた連句教室にも病後であられました。来て下さいました。

私が岐阜へ居を移してからは、毎月お手紙で指導して下さいました。未熟者の私に、手紙の書き方から始めて「付け」と「転じ」から「句い付け」までの御指導を微に入り細に亘って書いて下さいました。お手紙は桐の箱に三箱もありました。先生のお手紙を先輩に見せましたところ「ぜひこれを公開して欲しい」との事でした。先生にご無理を言っ

私の連句集の中に「書簡編」として入れさせていただきました。これを読んだ方々から、「こんな指導を受けた貴女が羨しい」と言われました。平成十一年、岐阜で国民文化祭が開かれた時、先生は岐阜の人たちに「誰から連句を教わっているの？」とお尋ねになりました。私の名を答えてくれた人たちに「貴女は私の孫弟子だよ」と言われたそうです。岐阜の地にも先生の教えは深く浸透しています。本当にありがとうございます。

### 終生 心の先生として

豊田好敏

東明雅先生は、私にとつていつまでも、どこにいても、忘れられない先生である。

最初にお日にかかったのは、亡き先輩の式田和子さんのお誘いで逗子の「初懐紙」への車中、昭和六十二年一月であった。その時の明雅先生における私の印象は、軽妙・洒脱でとても明るく、かつての大学教授という厳しさはなく、瞬間にファンになった。

その二年後に私も定年で会社を退職、新宿のACC連句教室に通い、東明雅先生に連句については当然のこと、何から何までご薫陶を受け現在を楽しんでいる。

いま、明雅先生のご著書『夏の日』を開いている。その「あとがき」に、根津芦丈先生のご逝去の様子が書かれており、当時の指導

者を失った明雅先生たち信州大学連句会が、模索を続けながらご意志を継承され、現在のわれわれに連句と連句の精神を伝えて下さったご努力がひしひしと感じられる。猫蓑会も更に一層の団結のもとに、本格的連句文芸の継承発展に尽くすべきだと思っている。

### 本当の俳諧師

篠原達子

心構えは予てだった筈が、いざ御逝去の報を受け茫然、親に去られた気持ちにも似ている。何ほど大きなお方、拠であられたことか。

私は昭和六十二年四月からACC連句受講、猫蓑入会、約十七年のご恩である。三年程も経ったころ先生が「うん、少し連句わかってきたかな」その時の付句を今に忘れない。「連句は瞬発力だよ」「連句は詩なんだからね」等々、お叱り箝めをいただくこと幾度ぞ。鈍くさ連句は結局不肖の弟子だが、好きだけ以外の猫並と思う。本当の俳諧師、現代の先達明雅先生に付けた幸運をつくづく思い、猫蓑に出会えた仕合せに心底感謝している。

源心庵の会も格別のお蔭をいただいた。毎年十一月は先生ご夫妻をお迎えするのが例となり、新形式『源心』発表をされる場になったのは、実に有り難く感激のことだった。

世態人情あらゆるものは変わっていくが、先生の教えの心髄、肝所は守っていかねばと、

端くれ猫も心に決めたことである。

### 君看よや双眼の色

蒲原志げ子

今年になって大事な人を二人も失った。喪は哀を致して止む。一滴の涙のなくなる迄悲しみを尽くす事こそが弔いであると。

師の後ろ姿を見失った焦燥と不安の今、偲ぶ数々を語るには時間が足りない。穏やかな表情の奥に、事連句に關しては一步も引き下がらない信念。学識に裏打ちされた講議が懐かしい。不肖の弟子で思わしい反応もなくさぞ嘆いて居られた事と後悔ばかり。

ほろ酔い機嫌で肩よせ唄った歌の数々。いとお酒を召し上がりました。もう一度杯を交わす機会のない事が残念です。

春に私の連れ合いが逝きました折には優しい慰めを頂き、その後こんなにも早く逝ってしまわれるなんて。哀悼の言葉さえ出て来ないではありませんか。

君看よや双眼の色、語らざれば憂いなきに似たり、と。お許し下さい。

浄土には練達の俳諧師が数多おられます。う、会心の一卷の首尾祈り上げます。

## 神無月

橘朱鷺子

明雅先生、先生は百歳までも、ずっと、ずっとお元気で居て下さると信じてをりました。たとえ、実作の席にお出掛け頂けなくとも、居て下さることが力だったのです。

今年十月が文字通り神無月となってしまうなんて、信じたくありません。

入門以来、一明雅連句ファンとして、気楽に連句の楽しさばかりに浸り、先生の発信されたものをしっかりと受け止め得なかったのではないかと、忸怩たるものもありますが、猫養会や深川教室で、先生のお声を聴き、天空に舞うような自在のお捌きに接して、得たものは大きく、幸せなことでした。

「そんなこと教えないよ」とおっしゃられないように、賜ったものを大切に育み、この道を歩んで行こうと思います。

先生、どうぞ天井の座をお楽しみ下さい。

## 庵号のこと

倉本路子

「爽楽庵となさい。いい庵号ですよ」。お電話で伺った最後の明雅先生のお声が耳の底にこびりついています。

熱意溢れるご講義、当意即妙のお話、朝日カルチャー連句入門での私の十三年間は大変

楽しいものでした。又唸りたくなる様な付句、妥協を許さない肥後もつこすの一面、居酒屋などで滲み出る暖かいお人柄——先生にお逢い出来て私の晩年はいきいきと楽しく輝いております。本当に有難うございました。

又万人の認める連句界への御貢献は申上げぬ迄もなく、連句が隆盛に向いつつある今せめてあと五、六年ご指導頂きたかったと残念でございます。この上は先生が全力を傾けられた連句及び猫養会を力を合わせて一層発展させることが御恩に報いることと思えます。

今頃は芦丈先生や弟子達と芭蕉様の下で冷酒二合連句談義に花を咲かせていらつしやることでしょう。御冥福心からお祈り申し上げます。

翁忌の翁慕ひて逝きたまふ

路子

## 二十七分間の著

小出きよみ

明雅先生大学御退官の前頃だったか、「きよみさん俳句やめて連句一本になりませんか。」と仰言ったことがあった。思いがけないことで、「今のままでお願いします」とお断りした。

今考えると、先生は既に猫養会に到る壮大な構想の芽をお持ちだったのか。

子規によって発句のみ生かされて、後の方は暗がりに蔵われていたみたいなの連句（俳諧）

を引っぱり出して、目の目を当てるといいう大きな仕事を明雅先生はなさったのだ。

古い話になるが、松本には中信合同俳句会という超結社の楽しい会があり、その懇親会の帰り、先生が、「きよみさん、お箸を持って二十七分間離さなかつたね」と仰言る。その間先生に見られて夢中で御馳走を平らげている自分が居たのだ、と思うとテレ隠しに笑うしかなかった。日本の国文学史の一頁を飾る足跡を残された先生にして、こんな楽しい一面をお持ちだったことが嬉しく懐かしい。

## 連句復活宣言

矢崎 藍

三月に「先生、めぎつねがまたこんなことを思いつきました」と「とよた市民キャンパス連句まつり03」の募吟企画を申し上げた。「すてきな三句とは考えたね。諸手を挙げて賛成だよ。頑張りなさい」とのお返事。以降半年めぎつね藍と仲間は、明雅先生の励ましをエネルギーに疾走した。それが——その連句大会本番まであと五日という十月二十日。先生の訃報であった。ただ茫然だった。

でも、当日は先生が見守ってくださっていると信じた。「連句は競争じゃない。連衆心だよ」いつものお声が耳元にある。全国からの連句人、中学生、インターネットからきた若者たちと、——連句による交流は比類のな



い新しい楽しさである。そして、それは先生がくださったもの。——昭和五十八年、あの「季刊連句」創刊号「連句の復活とその将来」の「東明雅の高らかな連句復活宣言」は、私たちをとらえ、今もゆさぶり続ける。先生、ありがとうございます。これからもどうぞお見守りくださいますように。

### 感謝とお詫び

根津美紗

昨年三月芭蕉庵例会に参加した。先生の発句「深川や蛙みつけし池の底」。先生の横に席を許され緊張の面持ちで巻きながら「先生、連句の真髄はなんでしょう」とお聞きしてしまった。先生は即座に「挨拶ですよ」と一言おっしゃられた。私は野暮なことを聞いてしまったなあ、どうしてもっと気の効いた質問ができなかつたのか悔んだ。がいま思えばお聞きしておいて良かったと思う。これこそ肝に銘じておかねばならぬことだ。そして十月十七日凌冬忌を終えた挨拶にお伺いした。すると階段を若者のように軽やかに降りてこられた。ああ良かったお元気で、祖父芦丈の齢は絶対超えて下さると確信した。あの足音はきのうのこのように耳に残っている。そして明るく年賀状の筆勢たるやまたもこれなら大丈夫と嬉しかった。

師の賀状筆勢尊き鞭となす

ますますご長寿を確信し安心していた。また春先にはカルチャーセンターの資料をねだり、いつまでも甘えに甘えを重ねて不遜な振舞いをしてしまった。いまはただお詫びと感謝の気持ちでいっぱいです。先生本当にありがとうございます。ありがとうございました。そしてごめんなさい。

### 三つのあだ名

極楽とんぼ 馬鹿殿 フェロモン

杉山壽子

少年のような明るさで「ほらほら極楽とんぼが飛んでくヨ・・。」と利子さんに話される先生。「もうっ言いつけちゃう」とか「もうっ先生嫌い」とか利子さん。「おう恐っ」と先生また私と侑子さんの顔を見ながら「馬鹿殿でアンタも大変だネー」と先生。侑子さんは「キョトン?」。私はほそっと「当つとる」と名古屋弁。時に手招きされ「名古屋のフェロモンちゃん君のこと」と、からかわれたり、こんな会話を平気で厚かましくしていた私達。

時にはちよつとメタファーを効かせ、一人よがりの付句に「こんな付けを教えた覚えはありません」と厳しくびしやり。

お通夜のおり、眠っておられた口元が八月中旬に頂いた最後のお電話の苦しそうなお声と重なり、哀しくてオイオイと泣けました。

先生もう一度三つのあだ名で呼んで下さい。叱つて下さい。今度は良い孫弟子でおりますから。

### 東明雅先生を偲んで

電通連句部部长 吉田憲助

机を両手でバタバタ叩いて「面白い!」とお喜びになった笑顔が忘れられません。

残菊と言へど蓄のまだ盛り 明雅

この発句が東先生と電通連句会との始まりでした。昭和五十八年十二月の、歌仙「残菊」。爾來休むことなく毎月一回不肖の弟子達に熱心なご指導を頂いて参りました。

電通出版の広告機関紙「電通報」にも二回ご寄稿くださり広く広告界に連句の真髄をご披露くださり大変な評判を呼びました。

築地の「ふく源」の隣にあった古ぼけた電通築地南寮が私達の本拠地でした。

コピーライター、デザイナー、マーケッターといった得体の知れない者たちの中で先生は実に楽しそうに辛抱強くご指導下さいました。弟子達は一向に勉強せずバカな句ばかりを作り、毎月先生を呆れさせてきました。

でも今思えば電通連句会は先生にとつてはよちよち歩きのキカン坊で可愛いお孫さんみたいなものだったのかもしれない。

追悼発句集

鶴一羽真青の空へ消えゆけり

東 郁子

儂さやひとつになれる鴛鴦の水脈

武井雅子

二来實

冬菊の薫りて雲を逝かしむる

磯 直道

巨星消えて涙のとめどなき秋思

伊藤白雲

嘸みしめる遺訓尊し秋の夜

内田素舟

先生を乗せたる鶴の渡り来よ

大野鶴士

又一人鬼籍に入るか初しぐれ

大畑健治

寸のびず八つ手の花よ明雅なし

國島十雨

鳩一羽鳴くにつけてもそぞろ寒

小林しげと

一時代築きし城の翁草

小林静司

俳諧師去りし枯野に道もなし

近藤蕉肝

木の葉散る恩師の庭の猫だまり

添田善雄

雲井の雁恩師ゆると立ち給ふ

竹内たつ子

猫養会會員

錦秋の大きいなる山暮れにけり

青木秀樹

佇ち尽くしある今生の時雨かな

佛測健悟

秋深し熊本人東明雅逝き給ふ

鈴木春山洞

蒼茫に道ひとすぢや石路の花

穴澤篤子

頂きし手紙の高や星冴ゆる

内田麻子

百代の過客や今し鶴渡る

坂本孝子

「夏の日」を讀返す日々置炬燵

杉内徒司

はいはいと出句催促ぬくめ酒

副島久美子

冬芽はや大樹を守り色づきぬ

中田あかり

つらねうたの思ひ出いくつ鶴渡る

市野沢弘子

遠き日の講議忍ぶや秋悲し

山口みづゑ

石路咲きてしみて思へり俱会一処

高瀬美保

初しぐれ石の蛙もともに哭け

上月淳子

哀しみの芯までしみる時雨かな

原田千町

いつしかの便り探せばずくの啼く

中川 哲

追悼の連句静かに時雨空

加藤治子

名残雲神去月となりけり

橋朱鷺子

安曇野の風に抱かるる冬衣

鈴木美奈子

大きな手の肩たたきたる小春かな

式田恭子

枝振を残し名の木の散りにけり

近藤守男

まなうらに仕種の在す時雨哉

加藤亀女

冬銀河ほら先生のにこり顔

諏訪欣二

翁忌の翁慕ひて逝き給ふ

倉本路子

身のうちを木の葉散りぬる散りやまず

小出きよみ

漕ぎ去りし船の跡追ふ冬の海

峯田政志

逝きたまふ二十一世紀の時雨かな

矢崎 藍

秋明菊不肖な弟子は立往生

根津芙紗

色変えぬ松に御遺徳偲ぶらん

小野シズ

木枯の轟と胸中吹き抜けし

加藤慶二

引く波の俄かに早し秋の暮

長崎和代

秋霖に寄るべき大樹失ひぬ

本田弥生

冬ざれや師の名筆を偲ぶらん 佐古英子  
 先生は千の風です小春です 松本 碧  
 白髻の温顔浮ぶ今年酒 繁原敏女  
 残されし庵の小蓑や冬柏 吉村多みこ  
 丹精の菊苑残す翁かな 高橋豊美  
 ダンディーな師の後ろでや冬ぬくし 五味蓉子  
 旅人の笠も軽かれ散紅葉 椿 紀子  
 雁や師の言たむ諧諷詩 権頭和也  
 凍月や肥後もつこすと交はず杯 中川 凡  
 銀の薄ひとすじ径のありにけり 山田歌子  
 愴々や猫の旅装に肥後しぐれ 登坂かりん  
 たましひのやう冬牡丹掌のなかに 遠藤史子  
 大落暉そと猫うち猫冬に入る 海野海砂  
 咲きそむる石路もにじみし別れかな 島村曉巳  
 主なき髭そり置かれ冬の朝 佐々木有子  
 明雅忌や連句の道のうすあかり 緒方 健  
 師の杖のかるきほとりや神渡 中野昌子  
 旅立ちの蓑のしづくや千鳥啼く 筒井紅舟  
 逝きし日のまなざし濡らすしぐれかな 青木泉水  
 蓑着けし猫の影かや霧流る 吉池保男  
 霜柱倒れんとして輝けり 和田順子  
 猫の目に涙今宵は星降らん 古賀一郎  
 御旅のいづく辺りや片時雨 秋山志世子  
 逝きたまふ人の息吹きか萩の風 八木聖子  
 秋惜しむ羽音残して鳥立ちぬ 稲垣渥子  
 悠悠と逝く人ありて初時雨 柿本時代  
 露滋き震なりけり雅風逝く 木村真呂  
 長月の芭蕉に会ひにゆく旅か 紺野千寿子  
 秋雨や恩師のお声偲ぶる 川津錦子

突然の無常の風や秋別れ 宮川侑子  
 おもかげはいつも笑顔や実千両 染谷佳之子  
 ご再考願へませぬか冬の旅 大島洋子  
 笠に着た大樹たおれて草紅葉 上島登志彦  
 見上げれば紅葉の光の空の青 田中寿美  
 初時雨笠も小蓑もなかりけり 西脇智子  
 時雨るるや猫蓑庵は戸を閉ざす 長谷川芳子  
 小短冊うながす手振り冬ぬくし 二村文人  
 背表紙に面影重ね冬の宵 山田美代子  
 師の示す道は直なり秋の果 井上蘭石  
 時雨山人入りし俣暮れにけり 生田日常義  
 時雨るるや重ね硯の蓋きしむ 鈴木千恵子  
 師に給びし批評を束ね秋さびし 間佐紀子  
 月光の耿耿としてあまねしや 宮内志乃  
 寒月よ師の逝く道を照らせかし 井上鶴鳴  
 師の影のとぶが如くに冬の空 中川真紀子  
 されど秋雅の夢へ発たれしも 川名将義  
 逝きし師の声耳にあり片時雨 山本要子  
 先生の御足を濯げ雪女 池田やすこ  
 師逝き給ひことに激しき秋の雨 難波さえこ  
 沈む陽を追ひて枯野に惑ひをり 伊勢本如代  
 底籠るかなしみの口や石路を挿す 中森美保子  
 逝く秋やかるみを猫の髻の先 青島ゆみを  
 初時雨大きな蓑の背遠く 松原弘子  
 ハンサムな冬將軍である今年 伴野末季  
 落葉ふみステッキ小脇に師は逝かん 花巻珠枝  
 面影の恩師に月の冴ゆるかな 関口靖子  
 大鷹を胸に見送る訣れかな 小池啓子  
 彼の岸の句座賑やかに爛熱く 須賀敬子

此の冬は空に珠玉のことばかな 中林あや  
 夢の世の枝折を辿る時雨かな 鈴木了齋  
 磯嶋のしきりに鳴ける別れかな 棚町未悠  
 留守電のお声優しき夜長かな 若林文伸  
 白象に白髻ゆれて秋の行く 梅田 實  
 面影に秋明菊の白さかな 松島芳子  
 時雨るるや先師の笑顔見えがくれ 荒川有史  
 尊像をかほりにこめて姫椿 林 鐵男  
 簀措きて影立去るや露しぐれ 水谷紀明  
 柿落葉床しき十七季 横山わこ  
 残る虫声つまりては声しほる 大矢房子  
 悲報聞く異国の窓の月に暈 根津忠史  
 山脈に沈む口拝む秋の果 山寺たつみ  
 秋の灯にゆるりと開く十七季 西田一枝  
 小六月師の文字滲む文眺む 小野芳梅  
 そぞろ寒女狐どのの泪かな 伊藤良重  
 木守や薫陶受けし越中路 吉藤一郎  
 闇照らす灯台無人野紺菊 佐々木洋  
 着ぶくれて日出づる方を拜しけり 山田華蔵  
 色葉散る音もゆかしき人情味 林 壤  
 面影はこみあげるもの鶴わたる 五十嵐讓介

(こ来實は五十音順、会員は名簿順)

夫 東 明雅葬送の際は猫蓑会より生花  
 と多額の御香料をお供えいただき有難う  
 ございました。また偲ぶ会を催していた  
 だき重ねて厚く御礼申し上げます。  
 猫蓑会の益々の発展をお祈り申し上げ  
 ます。  
 東 郁子

第二十四回芭蕉忌正式俳諧

芭蕉忌俳諧興行

猫養会十月例会「俳諧芭蕉忌」作品集

平成十五年十月十五日  
於 深川芭蕉記念館

脇起二十韻「百歳の」

二十韻「時雨るるや」副島久美子 捌

次第

役割

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆呼び出し
- 六 文台捌き
- 七 俳諧興行
- 八 花前
- 九 献香
- 十 花の匂披露
- 十一 端作り
- 十二 吟声
- 十三 文台返し
- 十四 作品奉納
- 十五 納硯
- 十六 挨拶
- 十七 退席

- 宗匠 原田 千町
- 脇宗匠 佛測 健悟
- 副宗匠 島村 暁巳
- 執筆 八代 嫺
- 知司 鈴木 了斎
- 副知司 林 鐵男
- 座配 秋山志世子
- 座見 池田やすこ
- 花司 中野 昌子
- 香元 鈴木美奈子
- 配硯 鈴木千恵子
- 同 式田 恭子
- 同 山本 要子
- 老長 上月 淳子

百歳の気色を庭の落葉かな 翁  
末頼もしき吾子の袴着 青木秀樹  
海の詩トランペットに響かせて 鈴木美奈子  
珈琲豆を工房に挽く 佛測健悟  
柴犬といざよひの月賞でながら 秋山志世子  
銀木屋が好きといふ人 島村暁巳  
身の裡に新酒を醸すやうに恋 鈴木了斎  
そびゆる塔は堅く錠鎖す 林鐵男  
閑取の武者ぶるひして星を取り 中野昌子  
いつか帰らん藍を刈る里 上月淳子  
夏祭囃の大蛇が主役にて 池田やすこ  
シャッターチャンス狙ふ首長 山本要子  
こんなことあんなことまで秘密にし 式田恭子  
四十一でも振袖を着る 鈴木千恵子  
狼の紅引きて笑む月の宵 生田日常義  
駐在さんはパトロール中 大島洋子  
ひっそりと井伊大老の供養の碑 根津忠史  
乗込鮒で母の甘露煮 佐々木有子  
花撩乱夢まぼろしの境にをり 原田千町  
春雪光るアルプスの峰 執筆

時雨るるや深川めしに独り酌む 久美子  
南天の実の熟れし坪庭 碧  
編集部顔新しく集ふらん  
子育て支援町が取り組む 昌子  
キオスクのやりとり無言小望月 華蔵  
駆けて来る娘の頬のさはやか 昌  
婿入りの噂しきりに松手入 蔵  
本命の恋まどろみの中 碧  
空と海いつか溶け合ふエーゲ海 碧  
第三楽章ロンドアレグロ 蔵  
呼びかけてゐれば応へる夏茸 悟  
閻魔参りは月影を踏み 悟  
はんなりと干菓子を抓むおいとほん 碧  
思慕の重さと家の重さと 悟  
この世から離れてふたり観覧車 悟  
マニフェストでふ呪文唱へる 昌  
常磐津の撥に遣せし伯母の意地 昌  
まんまるの石春の日向に 悟  
眼つむりて憩ふ旅人花の陰 昌  
初蚊止まるを為すままにして 蔵

連衆 松本碧 佛測健悟 中野昌子  
山田華蔵

二十韻「菊挿して」 市野沢弘子 捌  
二十韻「小名木川」 篠原達子 捌  
二十韻「深川や」 蒲原志げ子 捌

菊挿して旅のカバンを軽くせり

弘子

名残の月の昇る山の端

志世子

文化の日胡弓の調べしなやかに

未悠

タウン誌を読む猫脚の椅子

美奈子

境内にフリマ出店準備して

豊美

百円で買ふ恋の占ひ

悠

君と僕同じ時間を刻もうね

奈

賞味期限はすれすが良し

世

優勝の六甲嵐歌ふ街

美

ブランケットにくるまれて夢

世

新米の魔女は箒にしがみつ

奈

政官バトル果てる事なし

々

やうやくにE.T.C.を持ってみて

悠

水着のサイズFカップなり

美

道行のおさん茂兵衛に夏の月

悠

鳴かぬ鴉が煙突の上

世

粉まぜて捏ねて叩きて焼きしパン

悠

ふるさと自慢春興の婆

弘

西方の花を見むとや念珠僧

奈

蝌蚪の遊べる陽だまりの池

美

連衆 秋山志世子 棚町未悠 鈴木美奈子

高橋豊美

翁忌や鷗みならぶ小名木川

達子

散りし紅葉を入れる片袖

恭子

バスデーレシピアあれこれ思案して

わこ

子のフルートのぐんと上達

鐵男

新開地森深閑と望の夜

良彌

菊枕とて夢のささやき

わ

好きならば馬肥ゆるよな男でも

恭

野村萬斎追っかけの姉

わ

屋根裏に不思議かくしたメゾネット

恭

二重リングが一つちぎれる

男

治らない汗疹水虫掻きこはし

わ

つひに捕らへた瓜盗人奴

男

健脚の祖父母は富士をめざしたり

彌

妻は内緒でバイク免許を

恭

酒ワイン飲んだら乗るな銀流し

わ

こんなにやく閻魔凍る月影

達

この度の恩赦は何の記念日か

恭

羊の毛刈る剛毅朴訥

男

レガッタのゴール歓声花の土堤

彌

青空はるか昇る連風

執筆

連衆 式田恭子 横山わこ 林鐵男

佐藤良彌

深川や冬晴れの下猫会議

志げ子

大根引くなりかたち様々

泉子

クロスワードパズルびたりと収まりて

好敏

奥座敷より謡曲の声

敬子

高原のしずもりの中昇る月

景翠

ぼっちの陰でそつと逢引

要子

睦言のときれを急かす威銃

泉

子供が遊ぶあっち向いてホイ

景

探しても探しても出ぬ核の核

泉

おかか佃煮胡麻むすび買ふ

要

瀧行者念珠読経も打ち震へ

敬

月読男冷酒ぐい呑み

泉

これでもか甘えてみせる古き妻

要

けつたいなのは喜ばせ組

泉

ATMごっそり盗むシヨベルカー

景

ルパン三世垂らす涙

敬

老いたれば程よく過去を忘れ去り

敬

薄刃包丁研いでうららか

泉

花枝垂れゆるりと土にとどく迄

敬

風に乗り行く蝶々の舞

景

連衆 青木泉子 豊田好敏 須賀敬子

岩垂景翠 山本要子

二十韻「けふの庵」

橋朱鷺子

捌

二十韻「波高し」

峯田政志

捌

脇起二十韻「難波津や」

浅賀丁那

捌

けふの庵石の蛙と待つ時雨

朱鷺子

小春の河に長く曳く滯

常義

パソコンの入門クラス満員に

澄子

描くイラストカラー鮮やか

嫺

そぞろ神紅葉の便りきりもなく

實

新酒恋しと嘆く宿六

澄

月光に男まさりの声の艶

嫺

喝采消えて愛も果てたり

義

夢遙かシベリア航路開発へ

々

百万遍で又も引つ越し

澄

晩涼の四辻に立つ占師

實

正体不明鶴といふもの

澄

やすやすと折られやせんよ鼻柱

嫺

シルバーシート譲ったが縁

實

夜半の月閨を震はす虎落笛

々

宿の灰皿袖に忍ばせ

義

閑取になって札する故郷の山

嫺

台に納まる姿見の鯛

朱

花の渦率ゐてくぐる大手門

義

O B E N T O 囲む園児うららか

澄

連衆 生田日常義 八角澄子 八代嫺

梅出實

秋小寒晴れて大河の波高し

政志

虚空に赤く刺さる弓張

千恵子

床の間の壺に薄を満たしめて

路子

鼓の稽古トトとチチタタ

忠史

禁煙の町の巡回ボランティア

ゑみこ

性善説に疑問符がつく

路

貼り付けた凄い谷間にだまされる

史

珍しかった万智の恋歌

路

氷レモンアルミスプンでかきまわし

ゑ

三社祭の喧噪の中

千

叫ぶ声すは誘拐か迷ひ子か

史

羊数へて眠られぬ夜

々

縁の月丹前の裾引きづりつ

ゑ

ほっそり立つは雪をんなかも

路

力づくイケメンの彼奪ひさり

千

フーセンガムに顔を隠して

ゑ

積み込むは中華のみなり宇宙船

史

国歌に合はせ蝶々ひらひら

千

次の世も花繚乱と咲くならむ

路

清明節の腰に抱瓶

ゑ

連衆 鈴木千恵子 倉本路子 根津忠史

吉村ゑみこ

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

翁

小春の野辺をかけめぐる夢

丁那

S L の汽笛次第に近づきて

有子

宿題の子が卓を占領

千町

月球儀耳はどこか大議論

曉巳

秋振舞に猫も相伴

アンズ

攫はれてみたきやうなるそぞろ寒

町

綱渡りゆく美少女に惚れ

巳

つきあたり右へ曲がればカリブ海

那

パン屋の煙けふはまつすぐ

有

寺の鐘教会の鐘胸に鳴る

町

地雷の原の兵に涼月

ズ

髭面が麦酒の泡をふつと吹き

那

大っ嫌ひが大好きとなる

有

ミステリーどんでん返し拙劣に

巳

悪魔祓ひもありしスクエア

町

水しぶきあげて愛車を洗ひをり

ズ

らつきよう餌に釣りし飯蛸

有

暮れ果てて山ふところの花明り

町

翁媪の集ふ炉名残

ズ

連衆 佐々木有子 原田千町 島村曉巳

松島アンズ

二十韻「淀の細波」

佐古英子

二十韻「きちきちや」

古賀一郎

二十韻「石蛙」

池田やすこ

淀川の細波儂ぶや桃青忌

初時雨とて窄めたる傘

本場所の土俵に賜杯飾られて

鳩に餌まく幼児弟

メレンゲに包み込みしか白き月

そつとつなく手柔く冷やか

美術展君を描きて入選す

切り抜き記事のたまる空き箱

時効まであと一年の逃亡者

己が鬚なき顔を忘るる

名竿に釣られて睨む鬼虎魚

昇る月待つ夏草の山

物陰にとどく太鼓の乱調子

ジェラシーの果て猛るマクベス

抱きたいと骨になりても絡みつく

古代の謎を証す木簡

時々は記憶途切れる老の酒

羊の毛刈る男忙しき

風まかせ此方彼方へ花の旅

うららかなる空ふたひらの雲

英子

了齋

一惠

麻子

洋子

齋

麻

惠

洋

齋

麻

惠

齋

洋

齋

洋

齋

麻

英

惠

きちきちや古希言祝ぎて名乗り出づ

コンバイン駆る里の黄金田

海羸廻す月の差し込むリビンゲに

索性も顔も知らぬ隣人

石くれの街にとりどり犬の群れ

昼と夜とは違うお躰

雨を聴く黒いレースを滑らせて

フランスデモの記憶薄れる

3Bの鉛筆なめて描く童画

天神様は向う横丁

のんごうの楽に店主は夢を見せ

政治家のいふ偉いてんごう

奥方は処女の如く癩性で

どこで落としたあの犢鼻褌

冴え渡る海坂藩の月の影

母校の庭に埋めたおもひで

スコールを重ねて北の友と酔ひ

特派員から届く春愁

姉妹にてピアノ連弾花朧

四百年の大空に風

一郎

孝子

かりん

佐紀子

ゆみを

孝

孝

郎

佐

を

孝

を

孝

孝

孝

孝

孝

孝

孝

孝

石蛙啼きて伝へよ翁の忌

仙蓼ひゆんと伸びて鈴生り

面接に角の床屋を予約して

禁煙成功趣味は川釣

阿波踊月も一緒に進むらん

南瓜煮てゐる長き留守番

ポケットにどんぐりころころ洗濯機

たまに帰ってくるだけの人

恰好いい船乗りさんは手が早い

親に似ぬ子を産んだ猛獣

高原の落葉松わかば輝きて

月とラムネをぐいと飲み干す

入れ替り回しては去る摩尼車

生涯風呂に入らぬ民族

あかなめを供に姫君旅をする

ロールスロイスと山が結納

ドンペリのグラスの底に置く真珠

寝言譚言四月馬鹿なの

谷々を埋めつくして花の雲

養峰キツト据える屋上

やすこ

千寿子

弘子

淳子

秀樹

弘

淳

寿

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

樹

連衆 鈴木了齋 山寄一惠 内田麻子  
大島洋子

連衆 坂本孝子 登坂かりん 間佐紀子  
青島ゆみを

連衆 紺野千寿子 松原弘子 上月淳子  
青木秀樹

## 事務局便り

◇皆様のご協力で、十一月二十四日、学士会館における「猫蓑庵東明雅先生を偲ぶ会」を無事終えることができました。

当日の役割など、突然のお願いにもかかわらず、気持よく引き受けていただき、ありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

また、会にご出席の方はもちろん、欠席の方からも、お心のこもった句をいただき、感謝申し上げます。

先生が遺された志をしっかりと受け継ぐことで、新しい猫蓑会の歴史がつくられていくことと存じます。

◇本文ではご紹介できませんでしたが、藤祭奉納俳諧で、格別のお世話をいただいている亀戸天神社より、宮司大鳥居武司様が、「偲ぶ会」にお出掛けくださいました。

猫蓑会として十分御挨拶もできず、申しわけなく思っております。

この紙面を借り、大鳥居宮司様に、厚く御礼申し上げます。

どうか、これからも、よろしく御願ひ申し上げます。

## ◇猫蓑会例会開催予定

次回の例会の開催予定は次の通りです。

四月二十一日（水） 於亀戸天神社

藤祭奉納正式俳諧興行の後、二十韻で連句興行。

例年と開催日が異なりますのでご注意ください。

## ◇深川連句会へのお誘い

毎月第一日曜日、十三時より、歌仙興行。猫蓑会直営の座です。多数おでかけくださいますよう、ご案内申し上げます。

## ◇猫蓑発展基金に

ご協力ありがとうございました。

狩野康子様 五千円

猫蓑基金

みずほ銀行新宿新都心支店

普通預金 3376045

## 編集後記

事務局が猫蓑通信をお預かりして、五か月が過ぎました。その間、明雅先生のご逝去、立机のご沙汰など、猫蓑会にとっての大きな出来ごとが続き、その対応とお知らせにただ追われて参りました。

結社内の情報交流という原点に、立ち返ることが出来たでしょうか。

そろそろ専任のご担当者にお渡しし、さらに結社の機関紙への発展の道筋を付けていただきたいと考えております。

そこで、猫蓑通信へのご意見、続けてほしい企画、忘れられていた視点などについて、事務局までお寄せいただければ幸いです。

## ◇猫蓑会新会員紹介

五十嵐譲介様



季刊 『猫蓑通信』第五十四号  
発行人 猫蓑会 青木秀樹  
〒182-0003  
東京都調布市若葉町  
二―二十一―十六  
編集人 松本碧 生田日常義